

崎門学報

第八号

平成 28 年 8 月 30 日

崎門学研究会



目次

一面 靖献遺言を読む・謝枋得
五面 崎門列伝⑦高山彦九郎
八・十面 中臣祓を読む
土面 吞陸の御暴を揮擲す

『靖献遺言』を読む

巻の六、謝枋得

前巻で見たように、文天祥の主君である徳祐帝は皇位の御印である国璽を元に奉じて降伏し、自らも皇后や太皇太后と共に北送されてしまいました。しかし、国璽を敵方に奉じるといことは、事実上の退位を意味するものであり、文天祥はそのことを大義名分にして二王（端宗と衛王）を新帝に奉じて元への抗戦を続けたのです。次に第七巻の主人公である謝枋得も文天祥と同時代の人物であり、そこで扱う主題も天子が夷狄に降伏してしまった場合、遺された臣民は如何に身を処すべきかという問題に変わりはありませんが、本巻では特に、最早夷狄の籠中にある天子が発する詔命が、はたして天子の命として正当かどうかという点が問題になります。



謝枋得

及第し、皇帝自ら出題する殿試に臨みましたが、時の大臣宦官を罵ったため、第一甲から第五甲までである合格者の内、第二甲の首席に止まりました。ちなみにこのときの第一甲の首席が文天祥であり、合格者のなかには前巻で出て来た陸秀夫などもおります。

その後、枋得は帰郷した翌年の宝慶五年、

江東・江西両方面の宣撫使であった趙葵に召されて礼部・兵部両部の架閣に任ぜられ、信州・撫州両地方の義士数千人を召集して元軍の来寇に備えました。ここでいう宣撫使とは天子の旨を宣（の）べて民衆を撫安する職で、枋得が任じられた両部の架閣とは官庁の帳籍文案を管掌する官名です。

ときには、中央で権勢を振るっていた大臣の賈似道は、功のある人物が己に代わらんことを忌み、当時の將軍たちを失脚させようと、

では本編に入りましょう。謝枋得は字を君直といい、南宋の宝慶二年（一二二六年）、信州は現在の江西省上饒県の出身です。寶祐四年、枋得三十一歳の時に礼部（我が国でいう文部省）で行われた省試を受験して首席で

会計官を前線の各軍に派遣して収支を調査させました。その狙いは、「なにとぞ大將どものおちどを見出さぬと思へども何にもないゆえ思つて兵糧のぎんみ（吟味）によこめをまわす。兵糧と云ものは何が大勢して食ふもの。はたらくときはてんでんに食うぞ。又さわがしきときは盗をするで有ふ。なにとときこれがいりめ（入目）のつもられぬものぞ。それを知てさんよう（算用）せよと云。」（綱齋『講説』）とあるように、兵糧と云う軍会計の弱点を突いて落ち度を暴き、失脚に迫り込もうという策略です。やがて賈似道の使者は信州にも至り、枋得は宣撫使を庇おうと、家財を売り払って収支の不足を補ったために官を奪われました。

景定五年、枋得三十九歳の時、彼は科挙の試験官を命じられましたが、試験問題のなかで賈似道の姦悪を暴きあげ、言を極めてその罪を弾劾したため、またしても官を奪われて興国軍（湖北省陽新県）に追放されました。

枋得は、宋室の命運が二十年後に尽きることを確信し、宋を何としても亡ぼしてはならないという一念から賈似道と抗論し、失脚しても節を曲げませんでした。興国軍では、疊山と号して山門に籠り、一人道義を考究しておりましたが、人々はその理に対して厳格で、孤高を貫く態度を慕い、その土地の長官以下多くの民衆が彼に弟子入りして物事の理非曲直を尋ねたと言います。そんな枋得の座右の銘とした「清明正大の気、利を以て回すべからず、英華果銳の気、威を以て奪ふべからず（清明正大の気は利益で釣つても、もとへ回すことができず、英華果銳の気は權威をもつておどしても、かへさせることができぬ）」という言葉は、最もよく彼の生き様を表しております。

南宋の滅亡とその後

徳祐元年、枋得は五十歳にして江西の招諭使、次いで信州知事に任ぜられました。招諭使とは「降参する者を此方へ招き、叛く者を諭して、総体の司さになる役」（強齋『講義』）のことで、一種の軍司令官です。折しも元軍は長江流域に來寇したため、枋得はこれを安仁で迎え戦いましたが敗れ、妻子みな捕らえられて、自身は老母を奉じて建寧山中に隠れました。彼は山中で賤者に身をやつし、宋の滅亡を知つてからは、毎日喪服を着、都臨安の方を向いて慟哭したため、理由を知らない人々はこれを見て病人であると思いました。その後は、建寧を去つて建陽に移り、さらには閩中（福建省閩侯県）に至りました。

それから時はたち、元の至元二十三年、枋得六十一歳の時、元主フビライは、臣下の程文海を江南に遣わして人材を求めさせたところ、文海は宋の遺臣三十人を推薦し、その筆頭に枋得の名を挙げました。しかしこれを聞いた枋得は、文海に手紙を送り、「自分が、宋が滅んだにもかかわらず死ななかつたのは、九十三歳の老母が居たからだ。しかし

その母も去年二月に死んだので、もはやこの世に何の関心もない。亡国の大夫でいやくも義理を識る者は、自らの存立を図るべきではない。」といって、その推挙を断りました。

そこで、元の時代、地方を統括する為各地に置かれた行省の大臣をしていた忙兀台（ぼうこつたい）は枋得を招待し、手をとってその浪人暮らしを辛い、彼を仕官させようとなりましたが、これにも「枋得の名は亡国の臣のことであるから不吉である」と言って断りました。そこで今度は、宋から元に逃れた大臣の留夢炎が、枋得に仕官を力説しましたが応じませんでした。

これを見た福建省の大臣である魏天祐は枋得を説得して自らの功績にしようと企み、彼を欺いて自らの城に召し入れ、説得を試みましたが、枋得は天祐を相手とせず、かえって傲岸無礼な態度をとったため、天祐は怒って「汝は天子より地方の長官を拝し、国境の守備を命じられていたのに、安仁に戦いに敗れても死ななかつたのは何故か」と言って枋得を責めました。すると枋得は、「程嬰や公孫杵臼の故事」（『史記』に晋の臣屠岸賈、その君趙朔を殺し、趙氏の遺児も殺そうとしたが、趙氏の客友である程嬰と公孫杵臼が相謀り、杵臼は他人の児を趙氏の児と偽って殺された。それから十五年、晋の景公、屠岸賈を滅ぼすに至って趙氏の遺児と程嬰を召したが、程嬰は事成れりとして自殺した）を引き合いに出し、龔勝が餓死したのは王莽が漢から帝

位を篡奪してから十四年後のことであるがそれでも忠臣の名は失っていない。韓愈が「棺を蓋ひて事始めて定まる」と言い、司馬遷が「死は泰山よりも重く、鴻毛よりも軽きことあり」と言つたように、人の真価は死ぬまで分らないのだと云つて反論しました。天祐はこれを強弁だと言つて難じましたが、枋得も足下には何を言つても無駄だと言ひ返したので、結局天祐は怒つて枋得を北送することにしたので。この北送に当り、枋得が死を誓い、門人・故友への訣別の辞として賦したのが、綱齋が枋得の遺言とした『初めて建寧に到りて賦する詩』です。以下に本文を掲げます。

『初めて建寧に到りて賦する詩』

雪中松柏いよいよ青青。綱常を扶植する此の行にあり。

天下久しく龔勝が潔あり。人間なんぞ独り伯夷のみ清からん。

義高くして便ち覺る生捨つるに堪ふるを。禮重くして方に知る死甚だ輕きを。

南八男兒つひに屈せず。皇天上帝眼分明。

綱常は三綱五常

龔勝は、前漢の篡臣王莽に抗して死んだ人物南八は南霽雲で、安祿山と戦つた唐の武將で

す。

併せて以下に強齋の『講義』を掲げます。

・・・

「雪中云々」とは、孔子の「歳寒くして然る後松柏の凋（しぼ）むに後るることを知るなり」と仰せられたから云はれたぞ。「愈々」とあるが別して孔子の餘意まで発せられたぞ。孔子の松柏凋むに後ると仰せられたが、雪中でもみさほ（操）をかへず、愈々青々として見へる。節義を守る者は、常から人には越えて見えるものじやが、乱世でいよいよ忠義のほどが見える。三綱五常の大節義をたすけ立つるは、此の度のことじや。ええさて久しう龔勝の様な忠義ななかまが無うてさびしかつたが、されども拙者が居るからは、何の伯夷ばかりが清からうずとあること。忠義のなりを任じた語意ぞ。前の「綱常を扶植する此の行に在り」と云はれた氣象は、ここで見えるぞ。「義高くして便（すなわ）ち覺る生捨つるに堪ふるを。」義のなりにかへらず、義なりに高い場になつては、命ほど大事なものはなけれども、何とも思われぬ、惜しい気はないとあることぞ。「禮重くして方（まさ）に知る死甚だ輕きを。」子としては孝、臣としては忠と云ふなりに身を尽すが礼、其の礼なりにかへう様もなく大事な時に至りては、死はものの数とも思はれぬ。礼にくらべてみれば甚だ輕いことじやとあること。「南八男兒つひに屈せず。皇天上帝眼分明。」南霽雲忠義な者で、遂に節義なりに身を屈せず死した。

天道の能く見すかしてござるではないか、とあること。」

・・・

北送の途中、枋得は餓死せんとしてほとんど食べ物を口にせず、次第に体力衰弱して病を發しました。そして元都に着くと、謝太后の仮の墓所と徳祐帝の在ます所を訪れて再拝慟哭し、病状悪化するなかで医者の治療をも拒み、終に死にました。享年六十三歳。枋得の死後、息子の定之が枋得の遺骸を郷里の信州に埋葬しました。この定之もまた父の志を繼いで元に仕えませんでした。また枋得の妻の李氏は、元の將軍が妻にしようとしたのを拒み、自ら首を括つて死にました。この他、枋得の弟や叔父とその妻子なども皆元に屈せず、節義に死んだことでありました。

「みづから臣たるの義を尽くす」

以上が『靖献遺言』が記す枋得の経歴ですが、重要なのは枋得が、前述した留夢炎に与えた書である『劉忠齋に遺（おく）る書』のなかで、自らが元の招聘に応じて仕えない理由の一つとして、枋得が太皇太后から降伏を命ずる詔書をいくたびも頂きながら、全て返事をせず、そのまま太后が崩じて久しくなるいまとなつては、粗飯を供えて太后の御陵にお参りする面目ないことを挙げていることです。この書にある様に、徳祐帝の母君である太皇太后は枋得の再三の諫奏にもかかわらず、二三の大臣の謀を信じて祖宗の土地人民

を悉く元に献上し、自らも徳祐帝と皇后と共に投降して大都に北送されてしまいました。そして大都から書状を下し、枋得が元に降伏するならば、宋の宗廟社稷を残し民衆を救う事ができると言われたのですが、これは三歳の童子から見ても群臣たちを欺き、降伏させるための方便であることは明らかでした。これに対して枋得は「宗社存すべからず、生靈救ふべからざるを知り、太母に従ひて以て帰附せず、此れ某の人臣たる、みづから臣たるの義を尽くすなり」と記し、また「君臣は義を以て合ふものなり。合へば則ち就き、合はざれば則ち去る。」と記して、太后の詔命に従いませんでした。

こうした枋得の態度は、まさに文天祥が「社稷を重しとし、君を軽しとなす」と言った態度と通底し、であるがゆえに綱齋も明の学者である許浩の言を引いて「嗚呼、精忠勁節、文山前に倡（とな）え、疊山後に継ぐ。その行う所を質すに、一轍に出づるが如く、綱常を夷狄華を乱すの時に扶け、風化を宋祚傾頽の際に振ふ。身死すと雖ども、いまに至りて英氣凜凜として猶ほ存す。身を殺して仁を成し、生を捨てて義を取る。二公能く孔・孟の訓に遵ふと謂ふべし。」と述べております。

文天祥との違い

もっとも、文天祥と枋得に共通する点が多いとはいえず、両者の間には微妙ではあります。が本質的な状況の差異があります。

天祥の場合、徳祐帝は国璽を元に奉じてしまったのであり、それは事実上の退位を意味しました。ですから天祥はそのことを大義名分にして二王を新帝に戴き元との抗戦を続けたのでした。また綱齋と強齋の『講義』ないしは『講説』でも見たように、彼らが後醍醐帝に従って高氏に降った瓜生判官を批判したのは、既に三種の神器が一宮（恒良親王）に渡され御位が譲られていたにも関わらず、瓜生判官が後醍醐帝の綸旨を本物と信じて降伏したからでした。

しかし一方の枋得の場合、彼は降伏を促す太皇太后の命が本物であることを知りながらあえてそれに従わず、抗戦を続けたのです。太皇太后は皇帝ではないので、その命は君命ではありませんが、綱齋と強齋は共に、それがたとえ本物の君命であったとしても従う必要はないと述べております。強齋は先に枋得が記した「みづから臣たるの義を尽くす」の意味について、「君はどうあれ某（それがし）は宋の臣たるなりに義を守るとあること。かふした大義を知らぬに依て前に云た様に瓜生判官が高氏にたらされた。たとひ本の勅にしてからが高氏が様な賊と和睦なされたらば賊と一つになられたと云もの。すれば何ほど勅じやと云ても従ふ筈がない。どうなりともして天照大神以来の皇統を正ふ立るが全体の忠義ぞ。」（『講義』）と述べ、また綱齋も「もはやこのときは社稷にあずかる戦ひなれば社稷が重ひゆえ降参する君なれば社稷から云へば

かたき（敵）ゆへゆだんしらるると太后からしてあぶないめにあわするがどれくらい。義貞が北国へをちるとき瓜生判官がみやこがたなるに尊氏が似せ編旨をかきて天王は降参なされてあれは朝敵なり天子の勅なるほどに尊氏にそくいて義貞を討べしと云ふれる。瓜生がこれをまんまことにしてだまされたと云うて今で笑ふ。これがもとまぐれものゆへなり。天王の胤として尊氏に降参なさるるよふな天子で天照大神以来の正統を失ひ玉ふよふな君なればもはや正統のたたかひゆへこのみやこをとりたて奉て天子の位にそなへてたかわす。一度天子の位にござればらうぜきなことはなるまい故おしこめ奉てもくるしくなし。義貞は朝敵などと云せてあり編旨ならばにせは云に及ばずたとひ天子の勅筆であそばすとも引きいてすててとがはないことぞ。それを天子の降参なされたときもつぶして降するはだいかどのまくれた勇ぞ。正成などはこの筋がみえたそうな故天子のながさせたまふをききてもはや千破屋城を守りてぎくともせぬ。天子がなければ君をとりたてる人がなければつれひとりきりしぬ合点なり。」（『講説』）と述べております。

以上で述べられているのは、次のようなことでしょうか。すなわち、後醍醐天皇が高氏に降つたのは偽の三種の神器を擁されてのことであつたから、正統は一宮であり、高氏への降伏を命じる綸旨は無効である。しかしたとえ後醍醐天皇の擁し給う神器が本物であ

り、依然天皇が正統にましましても、敵である高氏への降伏を命じる綸旨は無効である。結局、国璽を擁する正統なる天子であっても、宗廟社稷を害する勅命は無効であるという結論です。このように、綱齋の議論のなかで護るべきは天子の正統、我が国でいえば天照大神以来の皇統なのであつて、その皇統を危うからしめる決定は、たとい三種の神器を擁する天子の命といえども無効なのでした。その上で、天子の正統を護持するには、国家において君臣父子の道義である三綱五常が正しく堅持されておらねばなりません。つまり、国家において天子の皇統と国家の道統は相即不二の関係にあるのです。

宋金交渉始末

したがって、正統なる天子を戴く国家がどんなことがあつても夷狄に降伏してはならないのは、それによつて領土が奪われ人民が危害を受けるからではなく、国家存立の根本をなす三綱五常の道義が頽廢し、それが結果としてとめどのない内憂外患を引き起こすからでした。

綱齋は、枋得の巻の大半を宋と金の交渉に関する記述に費やし、目先の平和を目的とした講和の名による降伏が、いかに甚大な災厄を国家にもたらすか、様々な資料を引いて論証しておりますが、なかでも、南宋の時代を生きた朱子が、紹興三十二年に孝宗の求めに応じて奉じた『壬午忠諫封事』は重要なこと

を云っています。この『封事』のなで、朱子
は、およそ世間で和戦の得失を論じるのに、
主戦と講和派がそれぞれの長所を飾って議論
が一定しないのは、彼らが何れも利害の末節
に走って義理の根本を見ないからであると述
べた上で、「仁は父子より大なるなく、義は
君臣より大なるなし。是れを三綱の要・五常
の本と謂ふ。・・・その君父の讎、與共（と
も）に天を戴かずといふものは、乃ち天の覆
ふ所、地の載する所、凡そ君臣・父子の性あ
るもの、至痛みづから己むあたはざるの同情
に発して、専ら一己の私に出づるにあらざる
なり。国家の北虜と、乃ち陵廟の深讎、その
與共に天を戴くべからざることを明らかに。
然らば則ち今日まさにすべき所のもの、戦ひ
にあらざれば以て讎を復することなく、守り
にあらざれば以て勝ちを制することなし」と
述べ、「君父の讎は共に天を戴かず」という
義理の根本から金との講和に反対し、あくま
で徹底抗戦を主張しています。これはどうい
うことかと言いますと、先に、北宋第八代皇
帝である徽宗の時代に華北の領有をめぐる
金と不和が生じ、金が宋に侵攻してきた際、
金の猛攻に恐れをなした徽宗は欽宗に譲位し
て出奔し、やがて宋の都も金軍に包囲されて
しまいました。これに対し李綱等の忠臣は徹
底抗戦を主張しましたが、金は莫大な賠償金
と領土の割譲、金帝を尊んで宋帝の「伯父」
とすることなどを条件とした和議案で欽宗を
眩惑したため、欽宗は李綱を罷免すると、自



杭州の岳飛廟にある
秦檜夫婦の像。右が秦檜

ら先帝である徽宗と金の軍に投降してしま
いました。すると金は欽宗から皇位を剽奪して
庶民の身分に落とし、二帝および后妃・太子・
宗戚三千人を拉致して北に去りました。これ
が欽宗の年号に因んで「靖康の変」と呼ばれ
る大事件であり、この事件を以て太祖趙匡胤
以来百六十年続いた北宋は滅亡したのでし
た。

しかしその後、欽宗の皇子でありながら、
唯一北去を免れた皇子である康王が即して南
宋の初代皇帝高宗となります。高宗は前出し
た李綱を召して意欲討伐を誓いましたが、ま
たしても黄潜善や汪伯彦らによる和議工作に
阻まれ、さらには高宗が講和派の元凶である
秦檜を信任すると、秦檜は岳飛や韓世忠等の
主戦派を斥けて金と和議を結び、その結果、
宋は金に臣下の礼を取り、毎年莫大な歳幣を
朝貢することになったのでした。この高宗の

後を継いだのが、朱子が『封事』を奉った孝
宗であり、朱子が『封事』のなかで金を「君
父の讎」と言ったのは、「靖康の変」で、徽
宗・欽宗の兩帝が拉致北送されたことによ
ります。

かくして成立した宋金の和約は南宋に一時
の平和をもたらし、南宋は農業生産の向上や
運輸交通の発達によって空前の経済的繁栄を
謳歌しましたが、所詮それは夷狄である金に
中原を奪われ臣従を余儀なくされた「敗北
の平和」に過ぎず、やがては元の勃興と侵略
によって南宋もまた滅んだのでした。南宋滅
亡の顛末は、本巻と前巻の文天祥のくだりで
見たとおりです。

さて、これまで謝枋得の巻を見てきました
が、翻って戦後の我が国の歴史に目を転じれ
ば、いささか慚愧の念に堪えません。という
のも、先の大戦の結果我が国は、「国体を護
持しうる」という条件の下にポツダム宣言を
受諾し、アメリカに降伏致しました。しかし、
その後のGHQが作成した憲法は、国民主権や
政教分離といった原則を明記し、天皇を主君
に戴く我が国体の尊厳を冒瀆する内容である
にもかかわらず、原爆の威力によって強制さ
れました。かくして国体の本義は捻じ曲げら
れ、そればかりか、夷狄であるアメリカの軍
隊が戦後七十年以上の長きに亘って我が国の
領土に駐留し続け、毎年数千億もの歳幣をア
メリカに本国に朝貢しているのです。たしか
にそれによって戦後の我が国は空前の物質的

繁栄を謳歌しましたが、それも所詮は南宋と
同じく「敗北の平和」に過ぎず、国家の三綱
五常は頽廢し、元国ならぬシナ共産党国家の
軍事的台頭によって、虚構の繁栄は打ち砕か
れようとしております。

こうしたなかで、我が国にとって何よりも
重要なことは、綱齋が強調するように、天照
大神以来の皇統を護持し、そのために、また
それによって三綱五常の大義を明らかにし、
君臣内外の分別を正すことに他ならないと信
じます。

【活動報告】

四月三十日、『崎門学報』第七号を発行する。
五月二十九日、第三回『靖献遺言』を読む
会を開催。第六巻の謝枋得を読了する。

六月十一日、明治神宮至誠館（荒谷卓館長）
にて、当会顧問、坪内隆彦氏の講演を拝聴
する。演題は「明治天皇の御修学と大御心」。
六月十五日・二十五日、愛媛尚友会の三浦
兄弟等と『中臣祓』の勉強会を開催する。
また併せて若林強齋先生の『中臣祓師説』、
竹内式部先生の『中臣祓講義』を読む。

六月二十日、日本国体学会主催の講演会で、
西岡和彦国学院大学教授の講演を拝聴する。
演題は『大祓詞に見る我が国体観』。場所は
学士会館。

七月十二日、愛媛尚友会の三浦君上京
八月八日、天皇陛下のおことばを拝聴
八月十五日、靖国神社参拝

崎門列伝⑦高山彦九郎

(当会顧問) 坪内隆彦

大きな結節点としての高山彦九郎

筆者が高山彦九郎を重視するのは、彼が王政復古運動の大きな結節点的役割を果たしたと考えるからだ。彼に先立つ崎門の朝権回復運動の精神は彼に引き継がれ、彼の残した足跡は後に続く國體思想の名著成立の原動力となり、さらに幕末の志士に引き継がれていったからだ。

彦九郎は、延亨四（一七四七）年に上野国新田郡細谷村（現群馬県太田市細谷町）で生まれた。先祖は、新田郡から出た新田義貞に、一族郎党を率いて仕えていた有力な武將で、彼もまた若くして尊皇の志を抱くようになっていた。



高山彦九郎

彦九郎は、室鳩巢が随筆集『駿台雑話』で楠公の進退は諸葛孔明の三顧出廬に比べて軽率であると批判したことに憤慨し、同書を地面に叩きつけたという。また、京都の「高氏」

の墓前を過ぎた時、その罪状を挙げて鞭で三百回も打ったという逸話も残されている。

彦九郎が『太平記』を読んだのは、宝暦九（一七五九）年のことだった。それからまもなく、彼は伊勢崎で村土玉水、浦野知周（神村）らと交友する中で、崎門学に傾倒していった。彼は難事件のある毎に、玉水門下の小松原醇斎に相談していたともいう。

彦九郎は、明和元（一七六四）年三月には京に上り、三条大橋に臥して皇居を拝したと伝えられる。彼はその後、少なくとも四度京都に上っているが、入退京の際には必ず、三条もしくは五条の橋上に坐して皇居を望みし、「草莽の臣高山彦九郎正之」と挨拶した。この彦九郎の姿は、いまでも三条大橋の東のたもとにある銅像が伝えている。



高山彦九郎銅像

朝権回復三事件の挫折

彼は青年期に崎門派による朝権回復運動の挫折を目の当たりにしている。宝暦、明和、安永の三事件である。

宝暦事件は、前回取り上げた、崎門派の竹内式部が、皇政復古の大業を成就されること

を夢見て、桃園天皇の近習徳大寺公城らに講義をした結果、京都から追放された事件である。宝暦六（一七五六）年には桃園天皇への直接進講が実現したが、式部は宝暦八年に京都から追放された。明和事件は、『柳子新論』を書いた山県大弼が明和四（一七六七）年に処刑された事件だ。そして、安永事件は、崎門の考え方が公家の間に浸透することを恐れた幕府が安永二（一七七三）年に一気に公家に連なる人物を弾圧した事件である。

彦九郎は、この三事件で斃れた先人の魂を引き継いだ。式部にとって桃園天皇というご存在があつたように、彦九郎には光格天皇というご存在があつた。

特に、光格天皇が朝権の回復に強い御意志を示されていたことが重要である。それは言うまでもなく、天下万民のための天皇親政の理想の回復という御志に根差したものであった。後桜町上皇から与えられた教訓に応えた寛政九（一七九九）年七月二十八日の宸翰で、光格天皇は「仰せの通り、何分自身を後にし、天下万民を先とし、仁恵・誠仁の心、朝夕昼夜に忘却せざる時は、神も仏も御加護を垂れ給う事、誠に鏡に掛けて影をみるのごとくに候」とお書きになっている（『宸翰英華』）。

ところが、幕府はこの大御心を体現しようとしなかった。幕府は天明の大飢饉にも有効な手を打てないでいた。こうした中で、天明七（一七八七）年六月七日、京都御所の周囲に人が集まり、千度参りを始めた。その数は

次第に増え、六月十八日には七万人に達したという。この事態に直面し、後桜町上皇からは三万個のリングが配られた。ついに、光格天皇は、禁中並公家諸法度にふれることを覚悟で、京都所司代を通じて幕府に対して、飢饉に苦しむ民衆救済を要求したのである。

彦九郎は、天明の大飢饉がもたらした悲惨な状況をこの目で見ようと東北を訪れていた。彼が現地で見聞した惨状は、『北行日記』（寛政二年六・十一月）に生々しく記録されている。そこには、住民たちが飢えに耐えかねて人の肉を食って死んでいった話など、書くのも憚られる惨状が綴られている。彦九郎は、天災以上に、重税や御用金の取立てが被害を大きくしたことを知り、幕府や藩への反発を強めた。

尊号宣下をめぐる幕府との綱引き

光格天皇は、朝議や祭祀の復古・再興を進めようとされていた。そして、光格天皇は、幕府に対して、実父閑院宮典仁親王に太上天皇の称号を贈ることをお求めになっていた。この尊号宣下問題の決着こそ、幕府と朝廷の力関係を左右する重大問題だった。

通常、太上天皇は、讓位により皇位を後継者譲った天皇に贈られる称号である。典仁親王は、天皇の位に就いたことはない。にもかかわらず、光格天皇が太上天皇の尊号を贈ろうとされたのは、典仁親王の御所内での席順の問題だった。藤田覚氏が指摘しているよう

に、諸法度の規定によって、親王であるため、関白はおろか三公（太政大臣、左大臣、右大臣）より下に座らなければならず、光格天皇はこれを耐え難くお感じになられていたのである。

光格天皇は、すでに天明二（一七八二）年に、尊号問題で動かれていた。光格天皇は、天皇にはならなかったが太上天皇の尊号を贈られた先例として、後高倉院と後崇光院の二件があったことを根拠とされ、尊号宣下をお求めになった。

これに対して幕府は、二例はいずれも承久の乱と応仁の乱という混乱期の事例であり、これらは先例たり得ないと説き、朝廷に対して再考を求めて拒否した。

光格天皇は、寛政三（一七九一）年八月に幕府に迎合していた鷹司輔平を実質的に更迭され、幕府に反感を持っていた一条輝良に代えられた。また、同年十二月には武家伝奏を久我信通から、やはり幕府に批判的な正親町公明に交代された。

同時期、光格天皇が四十一名の公家に尊号宣下についての意見をお求めになったところ、尊号宣下に賛成が三十六名、反対・保留が五名という結果となった。この公家の圧倒的支持を背景に、朝廷は再び幕府に対して尊号宣下を要求した。このときには、もし幕府が認めないならば、「天皇にもお考えかある」と迫った。しかし、幕府寛政四年八月、「尊号宣下は無用」ときっぱり回答してきたので

ある。ついに光格天皇は、「同年十月下旬を目処に尊号宣下を実行する」と一方的に宣言されるに至った。

尊号宣下運動の中心人物が、正親町実連から垂加神道を学んだ中山愛親であった。光格天皇の侍講をつとめていた伏原宣條らを通じて、朝廷との関わりを深めていた彦九郎は、愛親とも連携していたと見るべきである。

光格天皇が強硬な姿勢に転じられる直前の寛政三（一七九一）年三月、彦九郎は琵琶湖でとれた「緑毛亀」という珍しい亀を光格天皇に献上、それをきっかけに、光格天皇が側近に「高山彦九郎といえる者を知れるや」と尋ねられたことを知った。その喜びを、われを我と　しろしめすかや皇の　玉の御こえの　かかる嬉しさ　と詠んでいる。

九州望楠軒

寛政三年はじめ、彦九郎が玉木慎斎、西洞院時名、綾小路有美、錦小路頼尚、山田清斎らの崎門、垂加派と活発に交わり、四月には望楠軒に西依成斎を訪れていたことが特に注目される。こうした崎門派との対面を通じて、彦九郎が皇政復古の志を改めて固めるとともに、朝廷への働きかけを強めたことは想像に難くない。六月二十九日には、聖護院法親王の邸で、偶然にも、宝暦事件で閉門を命じられた唐崎常陸介（土愛）との初対面を果たしている。

そして同年七月、彦九郎は九州へと向かった。小倉から豊前、筑前を回り、久留米東櫛原村に森嘉膳を訪ねた。森は、崎門派の合原窓南の門人、廣津藍溪に学び、また田中宣卿の門人でもあった。翌寛政四（一七九二）年二月、彦九郎は熊本から薩摩に入り百日余り滞在した。この薩摩入りを支えたのが薩摩の赤崎貞幹（海門）である。貞幹は、西依成斎の門人藪孤山（朝陽山人）に師事、彦九郎の運動を支援していた。

薩摩藩九代藩主の島津斉宣は、尊号問題打開を志す彦九郎に理解を示していた。ところが、斉宣の父重豪の周囲がこれに反発し、彦九郎入薩の目的を知ると、彦九郎を危険視するようになる。結局、彦九郎は五月末に薩摩を去らねばならなかった。

彼の動きは幕府に察知されていたのだ。もはや、彼は京都にも戻れず、日向街道を北上し、延岡・竹田を経て、熊本に戻った。彼は尊号問題の状況を把握できないまま、九州各地を転々とし、再び久留米森家を訪問した。森の家からわずか百メートルほど北に行った場所にあつたのが、有馬主膳守居の別荘「即似庵」だった。

ここで彦九郎は主膳と会談している。昭和七年の五・二五事件で蹴起した三上卓先生は「主膳此地に雅客を延いて会談の場所として……筑後闇斎学派の頭梁たるの観あり、一大老楠の下大義名分の講明に務め、後半世紀に及んで其孫主膳（守善）遂に真木和泉等を庇

護し、此別墅を中心として尊攘の大義を首唱せしめるに至つたのである。此庵も亦、九州の望楠軒と称するに足り、主人守居も亦これ筑後初期勤王党の首領と称すべきであらう」と称えている。

即似庵での会談の内容は残されていないが、尊号問題に絡んだものと見て間違いない。彦九郎西遊の目的について、三上先生は「勤皇の大義を唱へて西海の諸侯を歴説し、諸侯を江戸に参観することなからしめ、以て幕府と久忍ある薩侯島津氏を中心とする尊皇義軍を結成し、車駕を西海に向へ奉り、和戦両様の構へを以て幕府に迫り、尊号問題を契機として皇政復古の鴻業を翼賛せしめることに在った」と、と一歩踏み込んだ説明をしている。

彦九郎の最期

この間、老中松平定信は尊号宣下を主張する中山愛親、正親町公明、広橋伊光の三卿を江戸へ召喚しようとした。この結果、朝廷側は幕府の意見に従い、尊号宣下を断念した。朝廷側は、三卿の江戸への召喚を必要なしとしていたが、結局、中山愛親と正親町公明の両卿を江戸へ向かわせた。寛政五年二月十日に江戸に着いた両卿は、翌十一日から尋問を受ける。結局三月七日、中山愛親は閉門（外出禁止）、正親町公明は「逼塞」（白昼の出入り禁止）の処分を受けた。

もはや、彦九郎も自由に行動することが難しくなっていた。寛政五年六月十九日、彦九

郎は森嘉膳宅を訪問、憑かれたように、旅行記や諸家から贈られた詩歌を水に浸して破り始めた。

森は彼の家に來ていた同志の永野十内を呼び、「なぜ、こんなことをするのか」と問い詰めた。すると、彦九郎は「予、狂気せり」と答えたという。

永野が、そのように旅行記を破棄すれば、かえって「謀反」を計画していたと疑われるではないかと言うと、彦九郎は黙って破ることを止めた。

その後、食事をし、気分が落ち着いたかに見えたので、永野は帰宅、森も席を外した。その一瞬の間に、彦九郎は切腹したのだ。戻ってきた森に、彦九郎は「主人、主人」と呼び掛けます。森が、傍に寄って「なぜ、こんなことになったのか」と言うと、彦九郎は、「永野氏とあなたに言い遺しておくべきことがある」と言う。

森が急いで永野を連れて来た上で、「遺言状はあるのか」と問うと、彦九郎は次のように言った。

「余が日頃忠と思い義と思ひし事、皆、不忠不義の事になれり。今にして吾が知の足らざる事を知る。故に天、吾をせめて、かくのごとく狂せしむ。天下の人に宜ろしく告ぐべし」

その夜、午後十時ごろになって、彦九郎の気力は衰え、倒れ伏してしまった。しかし、役人が来て、改めて「なぜ、自殺しようとし

たのか」と問うと、「狂気」と答えた。その後、外科医が来て治療をほどこしたが、回復するはずもない。翌朝に至って、彦九郎はついに絶命した。

徳川幕府の圧迫が強まり、自らの活動はもはやこれまでと悟ったに違いない。しかも、公家を巻き込んだ運動を展開していたとすれば、捕まって、彼らに類を及ぼすわけにはいかない。あるいは、味方を装いつつ幕府に内通していた者への絶望もあつたかもしれない。もはや、自ら命を断ち、後に残された志士に期待を託すしかなかったのだろう。

引き継がれた彦九郎の志

彦九郎との再会を一日千秋の思いで待ちわびていた藤田幽谷は、涙ながらに彦九郎を祀って祭文を詠みあげた。唐崎常陸介は彦九郎の遺志を継いで、同志の糾合を目指したが、志成り難く、彦九郎自決から三年後の寛政八年十一月、彦九郎を追うように切腹している。彦九郎、林子平とともに「寛政の三奇人」と称された蒲生君平は、彦九郎の自決に強い衝撃を受け、彦九郎の志を継ぐべく、『山陵志』執筆に邁進していった。

一方、彦九郎の自決は頼山陽の『日本外史』執筆の原動力となったと考えられる。山陽の父春水は彦九郎と深い交流を続けていた。「春水日記」には彦九郎に関する記述が、天明四（二七八四）年以来、繰り返して出てくる。天明六（一七八六）年四月十四日には、「服部

先生（服部栗斎）松島行、見立（送別）」とある。栗斎は、村士玉水門下の崎門学派である。

実は、彦九郎が尊号宣下問題で奔走していたとき、春水は芸州、薩摩兩藩主の間を慌ただしく往来し、寛政四年二月二十日には貞幹とともに薩邸で彦九郎の協力者たちと会合を開いていた。東京学芸大学教授を務めた千々和實は、次のように指摘している。

「この重大問題の時期に、同じ問題で高山が最も力を注いだ薩摩、久留米、中津三藩の侍講、嘗て藩内多数の高山共鳴者が騒いだ竜野藩の侍講、それに芸藩の侍講も加わった永年来の高山の心友の薩邸での晤会は、示唆する所小さしとしない」

寛政四年五月に彦九郎と別れた貞幹は、参勤交代で江戸に赴く藩主斉宣に同行していたが、寛政五年五月四日、岐薩の途につく。この時江戸にいた春水は、「広島にいる山陽のもとに立ち寄ってほしい」と貞幹に頼んだのである。六月四日、貞幹は広島に到着、山陽との対面を果たした。当時山陽は十三歳。このとき、春水とともに尽力した尊号問題の挫折と憤りが、若き山陽に語られた可能性は否定できない。千々和は、「慷慨の調子高く、尊号一件の最も新しい確実な歴史的悲劇の情報が、語られたに相違ない」と書いている。そして、彦九郎自決の事実は、その直前の貞幹との対面で山陽が受けた衝撃をさらに増幅させたに違いない。

ただし山陽は、尊号問題挫折の教訓として、朝権回復の事業が容易ではないばかりか、大きな危険を伴うことを深く理解したのだろう。

貞幹との対面後、『通鑑綱目』を読み始めた山陽は歴史編纂を志し、幕府に警戒されないような形で、國體回復に資する歴史書を作ろうと決意したと考えていい。彼は、しかるべき時期を待たなければならぬと、また広く国民の中に、わが国本来の姿が認識されなければならぬと思ったことだろう。だからこそ、彼は『日本外史』を書き、それが広範な読者を得ることを目指したのである。

一方、幕末の志士たちは、彦九郎の遺志を継ぐ者としていた。真木和泉もその一人である。真木は、天保十三（一八四二）年六月二十七日、久留米藩の木村重任らとともに、彦九郎没五十年に当たり祭典を挙行している。三上卓先生は、「真木の巡った足跡こそ、実に高山先生が七十余年前に辿った足跡ではなかったか。吾人は先生の事跡を調査し了つて、更に真木の一生を見る時、その暗合に喫驚するものである」と書いている。

彦九郎自決から八十年後の明治五年、御沙汰書とともに彦九郎に正四位が贈られた。そこには「草莽一介之身ヲ以テ勤王之義ヲ唱へ、天下ヲ跋涉シ有志ノ徒ヲ鼓舞ス。世ノ罔極ニ遭ヒ自刃シテ死ス、ソノ風ヲ聞テ興起スル者不少」とあつた。

『中臣祓』を読む

折本龍則

『中臣祓』とは

愛媛尚友会の三浦兄弟と『中臣祓』を読んだ。この『中臣祓』は、山崎闇齋の創始した垂加神道において、『日本書紀』神代巻と並ぶ重要な教典とされている。それは、垂加神道がその流れを汲む伊勢神道や吉田神道のなかで『中臣祓』が最も重要な教典の一つとされていることによる。闇齋は、寛文九年、五十二歳の時に、伊勢の大宮司大中臣精長から『中臣祓』を伝授され、これによって正式な神道者としての立場を固めた。また彼は後年、『日本書紀』神代巻の注釈書である『風葉集』と並んで、この『中臣祓』の注釈書である『風水草』を著している。

『中臣祓』は、またの名を『大祓』と云い（両者の間で宣下体が奏上体か等の若干の相異はあるが、本文は概ね一緒である）、古くは『大宝律令』の時代に端を発し、「延喜式」にもその名が見える。現在も宮中では毎年六月の晦日と十二月の大晦日の二回に亘って、「大祓の儀」が重要な宮中祭祀の一つとして斎行され、全国の神社でも大祓の神事が行われている。また上述した二回以外にも、歴史上大祓の儀は、戦争や天変地異などの国家的変事の際にも行われてきたようである。古代にお

いては、都の朱雀門の前に親王や諸王以下の皇族方、大臣百官と一般民衆を集めて、中臣氏が大祓の祝詞を天神地祇に奏上し、卜部氏が穢れを祓ったとされている。その後、応仁の乱以降、大祓の御儀は途絶えていたが、明治四年六月に再興された。現在における祭儀は、宮中三殿の一つである神嘉殿前庭幄舎を斎場として行われ、宮内庁職員や、皇宮警察官などが参列し、皇族方がおなりののち、掌典が『大祓詞』を宣読し参列方を御祓するという形で行われている（中澤伸弘『宮中祭祀』展転社）が、大臣以下の国民による参列はない。

なぜ『中臣祓』が重要なのか

この『中臣祓』が何故重要かというと、それは他の祓が主として個人の罪穢れを祓うのと異なり、『中臣祓』は、瓊瓊杵尊による天孫降臨と神武天皇による我が国建国の由来を説き、君臣の道義を明らかにすると共に、天下全体の罪穢れとしての国津罪・天津罪（くにつつみ・あまつつつみ）を清める祓だからである。山崎闇齋の孫弟子である若林強齋の『中臣祓師説』によると、この『中臣祓』は、「神武天皇の御宇、天兒屋根命の孫天種子命、御先祖以来伝へ玉へる道を述べて奏聞なされた」のが起源であるとされ、強齋の開いた学塾である望楠塾の学統に連なり、宝暦事件の首謀者としても知られる竹内式部は『中臣祓講義』のなかでより具体的に「時に古へ兒屋

根命政をとらせらるる時、素戔鳴尊が犯し過たせられける罪咎を、兒屋根命が天津祝詞の太諄辞を以て祓せられたる時、祭る所の神、祓の心法の大事が国家政の要領たる事と云を、今神武天皇へ種子命が申し上んとて、先づ神代の世壽と云、我が国皇道の道統、道の道統を始に上げられて、次に祓の事を解れた」と述べている。すなわち、『中臣祓』は、天兒屋根命が素戔鳴尊の犯した罪咎を天津祝詞の太諄辞を宣べて祓ったことに由来し、この祓こそが我が国の政事の要領であることを兒屋根尊の孫である種子命が神武天皇に申し上げようとして、まず我が国の建国の由来を「神代の世壽」として述べ、次に諸々の天津罪・国津罪を祓う祝詞としての「天津祝詞の太諄辞」を説かれたということである。ここでは以下に本文の意訳を記し、原文は本論の末尾に掲げることとする。

高天原にまします天照大神と高皇産靈尊は、八百万神達を集めて衆議せしめ、皇孫瓊瓊杵尊に豊葦原の瑞穂の国を安国として平安に統治せよとお命じになり、皇位を譲られた。これによって瓊瓊杵尊は、荒ぶる神たちを説き従えたので、それまでぶつぶつ文句を言っていた木々や草草も大人しくなった。そこで瓊瓊杵尊は御座なされた天の磐坐を立ち給い、禁門である天の磐戸を押し開き、幾重にも重なる雲霧をかき分けて葦原の国に降臨されたのである。その後、瓊瓊杵尊が天下られた九州から東征された

神武天皇は、天下の中心に位置する大和に都を定めて天皇に即位された。そして皇都に壮大な宮殿を建て、天照大神と高皇産靈尊の御蔭を頂いて我が国を統治し給うた。しかし、そのうち我が国では様々な国津罪・天津罪（地上の罪と天上の罪）を犯す者が現れたため、朝廷では大中臣が贖物（あがないもの）を千座の置座（ちくらのおきくら）と呼ばれる台の上に置いて天津祝詞の太諄辞（あまつのり）のふと（ふと）を宣読せよ。そうすれば天津神と国津神はこれをお聞き入れなされて罪という罪は祓え清められるであろう。

神皇一体・祭政一致の国体を顕現

凡そ以上のような内容であるが、重要なのは、我が国は、皇天二祖である天照大神と高皇産靈尊のご血脈を継がれる「日嗣の御子」としての天皇が、「天の御蔭、日の御蔭」、すなわち皇天二祖の御蔭を頂き国家を統治し給うという意味において「神皇一体」であり、また天皇は皇天二祖の命によつて我が国を「安国」として平安に統治するため、祓によって国家の罪科を祓ったという「祭政一致」の事実である。本来、高天原は理がそのままに行われ罪科を犯す者はなかった。しかしながら、天孫降臨して以降、気の世界である葦原の中つ国では、「天の益人」が様々な罪科を犯し過つた。そこで古来の我が国では、こうした罪人らの罪科を国家の政法としての刑罰

によつて処するのみならず、心法としての祓によつて清めることを肝要とした。ここに政事（まつりごと）と祭事（まつりごと）を表裏一体とする我が国の「祭政一致」たる所以がある。『中臣祓師説』は次のように説いている。「天下の人民も、罪科あるを覆い隠して、罪ない顔をしてからが、実に罪があらばなんとせふ。天下のしをきにそむき、神明の冥慮にみかぎられては、一旦陳じてよしなにしていなが、なんの栓ないこと。刑罰をまぬがれても、実に天地神明の冥罰を蒙れば、天地無窮の間、その罰のがるべからずして、禍を子孫に貽す。実に畏るべきこと也。しかれば自ら犯過罪科を一点毛頭覆ひ隠すことなく、明白に申し出でるでなふては、どこまでも逃られぬにきはまりたることぞ。・・・祓の用は全くここにあることで、祭政一理の事実也」。

かくして国家の汚れを清める重要な祓とされた『中臣祓』は、瓊瓊杵尊の子孫である中臣氏が宣つたから『中臣祓』というのではない。本来、中臣の「中」とは君臣の守るべき徳を意味し、中臣とは君臣合体してその徳を守る道のことを意味する。よつて、中臣氏は祓によつてその中の徳を守る職掌に因んで後世付けられたものである。垂加神道はこの中の徳を重んじ、『中臣祓師説』も、この「中」について「中と云ふより道の大事はない。君もこの中を守らせられ、臣もこの中を守ると云が道の真味ぞ」と述べている。ここでいう中の徳とは、山崎闇齋がいみじくも「道は大

日靈貴（天照大神）の道、教へは猿田彦の教へ」と述べたごとく、君は天照大神の教えにしたがつて民を慈しみ、臣は君を守り奉ることを意味する。また『中臣祓講義』は、「中は君のことを云うとし、この君の立つところに道が生まれ、臣下はその中たる君を守ることを道とすると説いた上で、「天下を治むるも、天下中が皆父子は親く、君臣は義と云やうに五倫皆な揃ふて、仁義礼智の天理の儘なれば政はいらぬ。兎角氣に渡れば其の父子が不親、君臣がたのもしうなく不仁不義をするから、天子も諸侯も代官も奉行もいる。然れば政は其の邪な氣を祓ふより他はなひ。夫れを祓が政の根本じやと云事。」と述べ、中の徳をより具体的に儒教的な三綱五常の道義と同意しているのである。

時の権力が畏れる『中臣祓』

さて、以上見たように、垂加神道が重んじて『中臣祓』は、国家の罪穢れを祓うことによつて、「神皇一体」、「祭政一致」を我が国家の真姿として顕現するとともに、君臣合体して守るべき「中」の道、より具体的には三綱五常の道義を明らかにすることによつて国家を正道に帰せしめる重要な意味を持つていた。こうした性格を持つ『中臣祓』は、朝廷を敬して遠ざける時の権力にとつて都合の悪い存在であつたとしても不思議ではない。筆者がある識者から聞いた話によると、徳川幕府の時代に大祓の儀が中断されていたのは、

この神事が齎行されると、君臣の義が明らかにされ、諸侯に過ぎぬ幕府の専横が露見するのを幕府が恐れたからであるという。

そしてそのことは現在の政権についても言う。というのも、現行の憲法体制は、「象徴天皇」を戴きながら、一方では「政教分離」を規定し宮中祭祀を「皇室の私事」と見なし てきた。そのなかで「大祓の儀」も一部の宮内庁関係者のみで内々に行われてきたのである。しかし、これまで述べたように、『大祓』ならぬ『中臣祓』は、国家全体の罪穢れを祓うことによつて君臣の守るべき道義を明らかにし、君臣が一体となる重要な意義を持つのであるのだから、「大祓の儀」は本来、天皇や皇族方と共に、首相以下、大臣百官や一般民衆を集めて齎行すべきである。あるいは別の言い方をすれば、崎門・垂加の学が志向する我が国の朝政回復にとつて、『中臣祓』ほど、重要な意義を持つ祓ないと言いうるのである。

『中臣祓』 高天原に神留り坐ます皇親神魯伎神魯美の命以て八百萬神等を神集ひに集ひ賜ひ神議りに議り賜ひ我が皇御孫命を以て豊葦原水穗國を安國と平らげく知ろし食せと事依さし奉りき此く依させ奉りし國中に荒神等を神間に問給ひ神拂ひに拂ひ給ひて語問ひし磐根木立草の垣葉をも語止めて天の磐座を押し放ち天の磐戸を押し開き天の八重雲を伊豆の千別きに千別きて天降寄さし奉りき此く寄させ奉りし四方の國中に大倭高日國を安國と定め奉りて下津磐根に宮柱太敷き立て高天原に千木高知りて皇孫尊をば美豆の御舎に仕ふ奉りて天の御陰

日の御陰と隠れ坐して安國と平けく知ろし食さむ國の中に成り出でてむ天の益人等が犯し過ちけむ種種の罪事を天津罪とは畔放溝埋樋放敷時串刺生剥逆剥尿戸許大久の罪事を天津罪と宣り別けて国津罪とは生の膚断死の膚断白人胡久美己が母犯せる罪己が子犯せる罪母と子犯せる罪子と母犯せる罪畜を犯せる罪昆蟲の災高津神の災高津鳥の災畜仆し蟲物せる罪国津罪と宣り別けて許大久の罪出でむ此く出でば天津宮事を以て大中原の天津金木を本打ち伐り末打ち伐りて千座の置座に置き足らはして天つ菅麻を本刈り断ち末刈り断ちて八針に取り刺いて天津祝詞の大諱辞を以て宣れ此く宣らば天津神は天の磐戸を押し開きて天の八重雲を伊豆の千別けに千別けて聞こし食さむ國津神は高山の末短山の末に登り坐して高山の伊恵理短山の伊恵理を掻く別けて聞こし食さてむ此く聞こし食しては罪と言ふ罪は有らじ物ぞと祓ひ申し清め申す事を科戸の風の天の八重雲を吹き拂ふ事の如く朝の霧夕の霧を朝の風夕の風の吹き拂う事の如く大津の辺に居る大船の船綱解き放ち船綱解き放ちて大海の原に押し放つ事の如く

彼方や繁木が本を焼鎌の利鎌以て打ち拂う事の如く遺の罪は有らじ物ぞと祓へ申し清め申す事を高山の末短山の末より佐久那大りに落ち瀧津速川の瀬に坐す瀬織津比咩と云ふ神大海の原に持ち出し給ひてむ此く持ち出し給ひては荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す速秋津比咩と云ふ神持ち加加呑みてん此く加加呑むては伊吹戸に坐す伊吹主と云ふ神根國底國に伊吹き放ち給ひてむ此く伊吹き放ち給ひては根國底國に坐す速佐須良比咩と云ふ神持ち佐須良ひ失ひ給ひてむ此く佐須良ひ失ひ給ひては今日より後罪と云ふ罪咎と云ふ咎は有らじ物ぞと祓ひ申し清め申す事を天つ祓戸の八百萬神達に平けく安けく聞こし食せと啓す（近藤啓吾先生『神道大系 垂加神道（上）』の訓を参照）

『中臣祓』 若林、竹内 両先生の講義を拜読して

(愛媛県師友会ひの会) 三浦夏南

崎門、垂加神道が最も重要とした古典は日本書記神代巻と中臣祓である。とりわけこの中臣祓は、我が国の道を説いた古典として重く扱われた。崎門学者竹内式部先生は「我が国上古よりの道を解きたる書と云は此中臣祓一書ならでは外にない。」と言われている。

中臣祓は大きく二つに分けることができる。一つは神代の壽詞である。壽詞は天照大神様の御神勅、天孫の降臨、神武天皇の肇国を語り、皇国不動の基礎を示し、本来の我が国の在り方を讃えたものである。二つ目は祓。本来の姿は宇内に尊くとも、栄枯盛衰、気の清濁は避けることができない。そこで罪穢れを祓い、本来の皇国の姿に回歸することが必要になる。これが祓である。

中臣祓は国家の罪穢れを祓うことを天神地祇にお祈り申し上げるものであるが、同時に各々が自己の内に反省し、己の罪穢れを祓うものでもある。特に若林強齋先生はこの点を強調しておられる。「祓と云は畢竟する處、上の祓を承けて、下面々己にたちかえつて、わるいこと、汚れたことを祓ふより外ない。これが又面々祭政の理にそむかぬと云もの。」己の心を清々たらしめること。これこそ己の為にする学、魂の学問であり、面々が罪穢

れを祓い清め、清々の心に至る時、皇国は本来の皇国に回歸する。代々の先祖を通して御皇室と繋がり、御皇室の中心に居られる天皇は天神地祇と結ばれている。神々と祖孫一貫である我々皇民は、神々と繋がる心神を頂いており、気の清濁により心の曇ることはあつても、罪穢れを祓い清めることができれば、清く明るい神の心に回歸することができ。この確信の下、崎門の先哲は皇国の道は祓の一字に尽きると断言された。崎門の学は博にして約。造化から人倫まで、天理を説けば道は広大であるが、その学の根本を祓の一字に見出された。

朱子学においても性善説を語り、氣質を学によつて変革し、天より与えられた本性へと回歸すれば、聖人となることができると説く。つまり、己に克ち礼に復する、人欲を断ち、天と合一することを目指す。この克己こそが神道においては祓に他ならない。しかし、克己こそ学の要であるが、己でもつて己に克つということなどできるであろうか。ここに朱子学最大の難点があり、私は個人の体験としてもここに最大の苦しみを持つ。克己によって人欲は廃せるのか。人為によつて天に帰することはできるのであろうか。そして、頼みとするその天といい、理というものは観念でしかないのではないか。

この学の根本問題に、我が皇国の神道は明確な救いを与えてくれる。我々皇民にとつての天は血のつながった神様であり、本来清明

であるこの心神も天神地祇と一体の賜物である。我々が必死の覚悟でお祈り申し上げれば、神々は必ず答えてくださる。神々は我々を見守り給う父母のような御存在である。なんと有難いことであるか。我々は神州にいのちを頂いた神民であることに感謝の祈りをささげ続けねばならない。我々皇民にとつて克己とは、神への祈りの中に、神との一体感の中に、そして、神の御加護の下に自ずから生じるものである。

しかし強齋先生は、神いますことの有難さだけではなく、それ以上に神々に対し奉る我々の必死の覚悟を求める。「底心つくして按排布置なく、赤子の様な心になつて申さねば、御間届はないぞ。ここがきわめて大事。今迄犯し過つた罪咎はせふことがない。自首して蔽隠さず、贖物を出し、つんと吾が誠の至り、底心から神皇へ御断申し上げ、御間届けあらふあるまゐはあなた次第、そこは此方の思慮にないこと。唯一心不乱になげき切つて申し上より外はないぞ。一旦祓つて再犯するやうなことでは、却つて神を瀆し慢ると云もの。」ここに強齋先生のただの神頼みとは一線を画した敬虔なる祈りを拝することができる。

繰り返すが、学問の要諦は克己復礼にある。大いなる川の清流より外れ、濁り腐敗した水のように、天に背き、私利私欲にふける人間は必ず腐敗する。どんな汚れた水も、母なる海に帰れば、溶けて帰一し清明になる。人も

父母に帰り、先祖に帰り、天皇に帰り、天照大神様に抱かれて清明となる。罪穢れを清める祓の根本は神々を父母のように慕う赤子の誠心であり、身も心も捧げて、必死の覚悟で一心不乱に神に向かい切る敬虔なる祈りである。崎門の先哲の祈りの敬虔さに恐懼し、己の祈る心を反省し、天照大神様の御神勅のまにまに皇統護持の神籬の道を恐れ慎んで進まねばならない。

第四回、『靖献遺言』を 読む会のお知らせ

第四回、『靖献遺言』を読む会の開催日時が決定いたしましたので、お知らせいたします。テキストは前回に引き続き、近藤啓吾先生の『靖献遺言講義』（国書刊行会）を使用致します。次回は第七巻の劉因と第八巻の方孝孺を読み、併せて全体の総括をする予定です。

つきましては振るつてのご参加をお持ち致しております。

日時：平成二八年十月一日（土曜）

午後二時開始

場所：千葉県浦安市当代島一三二二九

アイエムビル5F

連絡先：〇九〇ー一八四七ー一六二七

（代表・折本）

時論

天皇陛下の

おことばを拝して

君恩優渥感泣に堪えず

去る平成二十八年八月八日、天皇陛下が国民に対しておことばを発表され、御譲位の意向を示された。陛下は御自らの高齢化によって、「象徴天皇」としてのおつとめを、これまでのように全身全霊で果たすことが困難になりかねないことや、先帝の不例や崩御と新帝の即位を同時に行うことが、社会を停滞させ、遺された皇族に負担を強いることなどを御憂慮され、「象徴天皇」としての御立場から皇室制度への言及を避けながらも、婉曲に御譲位の意向をお示しになられたものと思われる。

まずこの陛下の御言葉を拝聴した小生は、そのお言葉の一言一言に込められた、陛下が国民を慈しみ大切に思われる大御心のかたじけなさに、一国民として涙の出る思いであった。また同時に、これまで陛下が「象徴天皇」としての御立場を自覚され、そのあるべき姿に腐心されて来られたご労苦を拝察し、肅然と頭を垂れる思いであった。

いまやご勅慮が示された以上、臣下である我々国民は、安倍首相以下、ただ承認必謹あるのみであるが、その上で、現行の皇室典範では、御譲位に関する規定がないため、皇室

典範の改正に着手する必要がある。

皇室典範は国民の容喙を許さず

しかし、ここで問題となるのは、本来「皇室の家法」である皇室典範を、我々国民の代表機関である国会が勝手に議論し、変えてしまつていいのかということである。

周知のように、明治二十二年に制定された旧皇室典範は、明治憲法と同格とみなされていたが、戦後、新たに制定された現行の皇室典範は、一般の法律に格下げされ、国会の議決に従うものとされたのである。これは、国民主権を謳う現行憲法のもとで「象徴天皇」の地位が「国民の総意に基づく」存在とされたことによるものと考えられる。しかし、我が国における皇位の拠り所は、主権者たる「国民の総意」にあるのではなく、本来は、天照大神が皇孫瓊杵尊に授けられた「天壤無窮の神勅」、すなわち「葦原の千五百秋（ちいほあき）の瑞穂の国は、是、吾が子孫（うみのこ）の王（きみ）たるべき地（くに）なり。爾皇孫（いましめみま）、就（い）でまして治（し）らせ。行矣（さきくませ）。宝祚（あまのひつぎ）の隆えまさむこと、当に天壤（あめつち）と窮り無けむ」とあるのに基づくのであるから、皇位継承について定めた皇室典範の改正は、国会の議決ではなく、内閣が陛下の御勅慮を拝して決すべきものと考えする。

「象徴天皇」故のご労苦

ところで、今回陛下が御譲位を思召された背景には、多忙を極めるご公務の存在があるが、実のところ、そうした陛下のお務めは、法律の公布や国会の召集、衆議院の解散といったいわゆる「国事行為」の他は、憲法上如何なる規定もない。しかし天皇陛下にとつて最も大事なお務めは「宮中祭祀」によって国家の安泰と国民の幸福を祈るということであり、それは上述した「天壤無窮の神勅」と共に、天照大神が瓊杵尊に授けられた「宝鏡奉斎の神勅」、すなわち「吾が児、此の宝鏡（たからのかがみ）を視まさむこと、当に吾を視るがごとくすべし。与に床を同くし殿（おほと）を共（ひと）にして、斎鏡（いはのかがみ）とすべし。」にも示されている。そしてこのことは、陛下も、「私はこれまで天皇の務めとして、何よりもまづ国民の安寧と幸せを祈ることを大切に考えて来ました」と仰せになつてゐることからも明らかなのである。ところが、この宮中祭祀は、現行憲法における「政教分離」規定との兼ね合いから「皇室の私事」と見なされ、多くの国民がその存在を知らずにいる。

また一方で、陛下は、国事行為の他に、天皇の「象徴的行為」として津々浦々を行幸され国民と親しく接して来られたが、これについても陛下は、「天皇が象徴であると共に、国民統合の象徴としての役割を果たすために

は、天皇が国民に、天皇といふ象徴の立場への理解を求めると共に、天皇もまた、自らのありやうに深く心し、国民に対する理解を深め、常に国民と共にある自覚を自らの内に育てる必要を感じて来ました。」と述べられている。つまり今上陛下がこれまで続けてこられた「象徴的行為」としての行幸は、陛下が、「象徴天皇」のありように思いを致し、国民にその立場への理解を求める必要を感じられた結果であると述べられているのである。

これは大変深刻なお言葉ではないか。というのも、現行憲法が、「象徴天皇」の存在を「国民の総意に基づく」と規定したことが、畏れ多くも今上陛下に、天皇という存在に対する国民の理解を得るための多大なご労苦を強いながらも言いうるからである。このことは、我々国民として大変畏れ多く、陛下に対し深く謝し奉らねばならないことである。

上述したように、天皇の御位は、「国民の総意に基づく」ものではなく、天照大神が天孫瓊杵尊に授けられた「天壤無窮の神勅」に基づくものであり、また天皇にとつて最も大事なお務めは、国家国民の安寧幸福を祈られる「宮中祭祀」である。しかるに現行憲法は、この「宮中祭祀」を「皇室の私事」とする一方、陛下に「象徴天皇」としての多大なご労苦を強いていることが、今回の重大発表の背景にある根本の問題であり、臣下である我々国民はそのことを深く反省せねばならないと思考する次第である。（折本龍則）